

# 幼児教育の考え方(一)

——コメニウスのII 感覺的・宗教的——

宝仙学園短期大学 岡 田 正 章

十七世紀モラヴィア(現在のチェッコスロヴァキヤ)の教育学者コメニウスの教育理論の研究は既に数多くなされている。しかし、彼が幼児教育に関して払った努力は正しく評価されていない。その証拠に、一六三三年コメニウスがすべての母親たちに幼児教育の重要性を自覚させ、あわせて、保育の内容と方法と時期を指導するため特別に母親用の保育指針——正しくは「母親学校指針」(Informatorium Scholae Maternae) 英訳では「幼児の学校」(The School-of Infancy)——を著わしたことが、注意深く取扱われていない。今詳論できないが全篇十二章の各題目だけをあげると次のごとくである。

第一章 神の最も尊厳な賜物としての子どもは、私たちの最も大きな注意を求める。

第二章 なぜ神は子どもを授け給うのか。そして、その教育はどのように行われねばならないか。

第三章 幼児を正しく導くには訓練とガイダンスが正しく行われることが必要である。

第四章 子どもが学ぶものは何か。

第五章 健康保育

第六章 判断力の陶冶

第七章 労作教育

第八章 言語指導

第九章 道徳教育

第十章 宗教々々

第十一章 母親学校はいつ卒業できるか。

第十二章 小学校入学の準備には何が必要か。

ここでは、これらの論述の中にかがわれるコメニウスの幼児教育の考え方を簡単にみることにする。第十二章の間に、賢明な両親は小学校が楽しい場所であり、また教師がやさしく立派な人であることをあらゆる手段を用いて子どもに理解させる。しかるに多くの両親は学校を苦痛の場所、教師を恐怖の人と思わせているのは非常に困ったことである」という答をコメニウスはしている。もちろん彼のこうした回答は、両親の幼児に対する態度と幼児の学校ないし教師に対する態度との関係を数多くの例から統計的な操作を経て求めた結果によって基礎づけられてはいない。にもかかわらず、この答に示された事柄は、今日なおわれわれが就学前の幼児をもつ両親に求める基本的態度に等しいものであり、これを証明するために多くの科学的な努力を払っているともいえる。このような事例は「指針」の中に数限りなく多い。これは実験または測定などのいわゆる科学的に厳密な方法を用いないでも、いわば直観的直覚的な物の見方が鋭く教育という事象にふり注がれるならば、換言するならば平凡な現象の中に事柄の本質を見破る非凡な感覚をもつならば、幼児教育に関する重要な問題が、何人にも発見されることを示すものといえよう。事実コメニウスは「知識の始まりは常に感覚から起る。

感覚が知覚する前には何ものをも認識し得ない」という感覚主義をいたるところに展開しており、しかもその感覚がすべての人間に備わっていることを強調している。保育者が既成の科学的知識を完全にもたないでも、幼児教育に関する正しい洞察の可能なことに自信をもつことができるといえよう。

第二にコメニウスの幼児教育論はことばの最も厳密な意味において宗教的・聖書的ということがができる。たとえば、幼児が神に召される存在であることは、幼児らの我に來るを許せ。止むな。神の國は斯くのごとき者の國なり(マルコ福音書十章十四節)まことに汝らに告ぐ。もし汝ら翻へりて幼児の如くならずば、天国に入るを得じ(マタイ福音書十八章三節)という聖書の章句によって証明し、また幼児教育に対するおとなの責任を、我を信ずる此の小さき者の一人を躓かす者は、寧ろ大なる礮臼を頸に懸けられ、海の深処に沈められんかた益なり(マタイ福音書十八章六節)という章句によって基礎づけている。こうした聖書の立場からコメニウスは、

「幼児は神の似姿として等しくその全知という本性を備え、教師が十分の努力を惜しまない限り、あらゆる事物を把握することができ」という幼児に対する絶対の信頼に達し、かかる幼児を健全に育成せしめることを無上の喜び、使命とするいわば幼児に対する教育愛の権化ともみられるものもち得た、幼児の行動を絶え間なく洞察する習性も、このような幼児の正しい成長を宗教的な立場から一心に念ずるコメニウスの考え方の自然の現われともいえるであろう。

以上を要約するならば、われわれはコメニウスから、新しい科学の発達にともない、その成果を利用して、できる限り、科学的な根拠をもって教育効果の昂揚をはかることの必要を考えると共に、①

それによってつくざれない問題が存在すること、②その問題に対する正しくかつ暖い認識と実践とが、常に投げかける教育に関する鋭い感覚によって補われること。③その結果、科学的研究とその利用に対する切実な要求と、解決のための真摯な努力が生れることを学び、④それが幼児を神に最も近い存在とする宗教的な絶対愛に支えられるとき、最も強烈なものとなり得ることを教えられる。

## 仏教保育の在り方

神田寺幼稚園 友松 あきみち

宗教団体の多くが、学校教育、とりわけ基礎としての幼児教育に意を注いできたことは多分に伝道としての目的を含んでいる。仏教立だけでもわが国施設総数の四分の一強を占めている今日、宗教々の当否については充分に考えねばならぬ問題があると思う。

幼児期の生育過程を考慮すれば、幼児に憧憬を与え服従を強いることはできても、信仰を与えることのできぬことに気づく。成人の理解する宗教と、幼児生活の置かれるべき宗教的環境の明白な限界がある。そして、宗派的観念による宗教々育の危険がとくにこの点に内在していると云えよう。自分の置かれている仏教保育の立場に限って述べるが、私は、今日行なわれている行事中心や徳目教育についてはいささか疑念を抱いている。仏教の年中行事に参加するこ